昭和59年7月4日　神戸新聞掲載

めざせ甲子園 兵庫の球児 ⑤

御影工・3年

畑本敏治 外野手

不気味 隠れた強打者

今春打率.457、打点25

兄に学んだ負けじ魂

勝利への〝けん引役〟

御影工の三番打者、畑本敏治外野手（三年）は隠れた逸材との評判だ。兵庫県大会は昨年秋が小野（1―3＝延長十回）に初戦敗退。今年春は出場権がなく、中央球界には無名だが、石崎監督も「手首が強く、打球の速さが一級品。パワーもある」と太鼓判を押す。

なるほど、身長174㌢、体重71㌔の恵まれた体。百㍍11秒8の俊足に加え、遠投も百㍍。素質にも恵まれている。昨年秋の成績が1・118打数51安打、打点32で、打率・432。今年春も92打数42安打、25打点、打率・457の猛打ぶり。しかも秋から93安打中、長打が実に44本を数える。本塁打も通算15本。驚異的な数字だ。

昨年秋の神戸市立高校大会、畑本は兵庫商戦（9―5）で、3連続本塁打の離れ業をやってのけた。それもあの広い市神港高グラウンドの左翼フェンスをはるかにオーバー、真に新聞中の二階建ての屋根を直撃した。「おそらく120―130㍍は飛んだ。市神港の教頭先生におわびに行ってからった」とは石崎監督が語るエピソード。

畑本のパワーは兄敏治さん（京産大一年）への〝負けじ魂〟から生まれた。一つ違い。姫水東中時代は二人とも野球ひと筋。兄が捕手で三番、弟が左翼手、六番と、チームの主力を担っていた。その敏治さんが北須磨高へ進学後、あっさりサッカー部へ転向した。もともと、サッカーは年期のいるスポーツ。畑本が「高校からだと、レギュラーになるのは無理と思った」のも当然。

ところが、敏治さんは無類の頑張り屋。努力に次ぐ努力で、三年時にはエースストライカーにのし上がったばかりか、主将にも選ばれた。そして敏治の兵庫県大会で優勝。チームを今年正月の全国高校選手権へ導く殊勲をたてた。畑本は「兄は毎夜、近くの公園で、一人で練習していた。それを見て僕も負けずに、自宅前で素振りや、筋力トレーニングを始めた。お互いに意地し合って、真夜中の十二時近くまで頑張ったのも珍しくありません」と語り通る。

北須磨は初戦で敗れた。が、テレビに映る兄の晴れ姿を見て、畑本は「苦しくとも、最後までやり抜く努力の尊さ」をハダで感じた。その時、「今度はオレの番。必ず甲子園へ！」の思いが、わき上がった。

現在、畑本は野球部主将のほか、クラス委員も務める学校の模範生。三木前部長も「性格も積極的で、立派なリーダーシップの持ち主」と評す。本人は「何事も先頭に立ってやりたい方だから―」と照れるが、ナインの信頼は厚い。

かつて大物食いに定評のあった御影工。久しく低迷が続くが、現チームはあの神港学園（3―2、1―0）に二度勝った実績を持つ。今大会、どんな波乱を呼ぶか、畑本のバットにかかる。

◇全国高校野球兵庫大会の出場チーム紹介は九、十日付朝刊に掲載します。

「兄に負けるな！」、深夜の特訓が実り、県下でも屈指の強打者に成長した畑本選手＝御影工高グラウンドで